

湖上
石話

雲根志

前編

三

特1
1505



雲

根志卷之三
類化類

目録前編
白井氏藏書

金澤文庫



石 雞 蛇 人 虎 蟻 蓋根 石 電 諸物 牛 化 石

一 三 五 七 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七

鏡 蝦 瀨木 石 雙 犬 魚 龜 茨実 貝 化 石

二 四 六 八 十 十二 十四 十六 十八 二十 二十二 二十四 二十六 二十八 三十 三十二 三十四 三十六 三十八 四十 四十二 四十四 四十六 四十八 五十 五十二

雲根志

卷之三

目一



特1
1505

山茶実化石
楊樹枝化石
藻玉化石
胸紐化石
星化石
落星石
松化石

罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍

椹化石
杖移木化石
折板化石
石榴实化石
星石

罍 罍 罍 罍 罍

粗化石
材木化石
天馬石
檜化石
船木化石
索麩化石
古綿化石
芋化石
海老化石
石菖蒲根化石
竹化石

瓦 世 世 世 世 世 世 世 世 世 世

柴化石
御衣化石
黒柳化石
帆柱化石
牡蛎石
松毬化石
氷化石
烏木化石
鱧化石
鯉魚化石
胡桃化石

罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍 罍

せる自然石を捨ると予いまごんご

鏡化石 二

肥前^{いぜん}は^まありむう^い息長足姫尊^{いそながあしひめのみこと}神功皇^{かみこうみ}松浦山^{まつらやま}に在^ありて
ちりり^{ちりり}の玉^{たま}形^{かたち}を^か覺^さして^し鞠^{まり}一^{いつ}折^ひて^て曰^{いは}天神地祇^{あまのつみ}の^か為^なり
福^{ふく}を^た助^{たす}め^りと^し御鏡^{みかき}を^も用^{もち}て^けけ^り安^{やす}き^に安^{やす}き^に御鏡^{みかき}
化^{くわ}して^し石^{いし}と^なり^て山^{やま}に^あり^て鏡宮^{かみのみや}と^なり^て新古^{あたらしくふる}を^しり
家^{いへ}式^{しき}ア^あひ^んと^あひ^まを^いま^りたる^かが^もれ^まの^神や
志^まる^ん源^{げん}氏^{うぢ}北^{きた}流^{りゅう}玉^{たま}久^くら^りれ^まを^よ君^{きみ}より^いか^らふ^りに^から^りぬ
浦^{うら}ち^りか^がも^れ神^{かみ}を^とり^けて^ちち^りむ

石蛇 三

肥後^{いご}五阿蘇山^{ごあそやま}北^{きた}麓^{ふもと}門^{かど}に^あり^て石蛇^{いしへび}二^{ふた}あり^て長^{なが}と^短大^{おほ}首^{くび}尾^{おし}鱗^{うろこ}形^{かたち}

何^{なに}と^いふ^をを^しら^りと^しい^はふ^に大^{おほ}依^よて^むむ^う一^{いつ}の^蛇あり^てい^はは^れは^し
か^らま^りて^し石^{いし}と^なり^て又^{また}近^{ちか}江^え玉^{たま}大^{おほ}上^{かみ}新^{あたら}流^{りゅう}山^{やま}奥^{おく}山^{やま}寺^{てら}の^山
も^も蛇^{へび}石^{いし}あり^て首^{くび}の^めぐ^らを^まま^りと^し東^{あづま}へ^むか^り尾^{おし}は^し又^{また}
一^{いつ}二^{ふた}丈^{たけ}湖^{うみ}水^{みづ}の^方へ^むか^り山^{やま}中^{なか}より^もり^てい^はは^れと^し傳^{つた}へ^むむ^う
大^{おほ}蛇^{へび}あり^て天^{あま}竺^{ぢく}吳^ご鷲^{じゆ}山^{やま}に^あり^て良^よ嶽^{たけ}を^いは^らを^まま^りて^けけ^り
石^{いし}に^あり^て首^{くび}尾^{おし}も^もい^はは^れや^りる^りも^もあ^りて^けけ^り
そ^のむ^し時^{とき}の^蛇の^いは^はれ^は三^{さん}傳^{つた}へ^むむ^う云^いは^れ石^{いし}湖^{うみ}水^{みづ}の^辺に^あり^て平^{ひら}流^{りゅう}山^{やま}
あり^てい^はは^れを^しら^りむ^しと^しけ^けり^て又^{また}お^おい^は蛇^{へび}石^{いし}と^いは^れあり

蝦蟇石 四

寂^{さむ}光^{みつ}と^し初^{はつ}瀬^せの^新化^け傍^{かた}あり^て元^{もと}來^{きた}信^{しん}濃^{のう}の^産よ^り今^{いま}和^わ石^{いし}ヲ^を
ト^と野^のに^あり^て信^{しん}濃^{のう}に^あり^て化^け石^{いし}を^産ま^りか^らす^のこ^と又^{また}信^{しん}濃^{のう}に^あり^て

雲根志

前編5卷

三



相良大磯此或寺の什物あり他はひくけ所は虎と
 つま遊女ありて勇家十郎祐成と通を世の人れ身よと
 内ら貞女あり袖成死て後虎おきさうあり一の大石と
 成まうとそかちちささむるよあむを兵うらうき大
 石なりよりてさうが石と号し南寺よあむし冥宇記乃
 貞婦石ならんり

石蟹 八

石蟹漢産多し業用は備ふ甲足亦乃欠れありて全
 ち其そのあり初又養まらぬ日向玉帯の近山よおけ山中
 よ多し正しく是蟹の化せるもの之石中よほり抱いかく
 とちち中よ抱おを抱ハやうう之足ささむる物まはひに

伊穀の湖辺よて大なる蟹石をほり人あり泉尻塚の浦よ
 て抱いさるるもありさほりはまきさうしてつひよあるよ
 けく尻張のそをささり見おしる人あり其は山
 よありとつとよささ土のかさまりれとさ石を破て
 中よ蟹のからあるのさうておけおさる抱あり或人
 丹波福智山の近辺山中よあらと東教寺断ふ蟹石亭と

石全嵐
 色如足
 者蓋色



号する人の蟹石の合葬のその教十品
 養せり蟹石和産かし牛まきよは
 岸或は山中土中よてほりあり
 物造化論よ云土中を深く掘りあり
 て蟹の石よ化しるをほりしと知



本草の石類(ちり)

蟻化石 九

人ありきよはては云核有馬志護山に蟻化石ありき
うらゆきて指ひけりうとて城の石と化ししるを
とらありて予よんせらる首尾足等合して生く城
實ハ石よりて大さくさくありあり信二山蟻といふもの
よそ希くかた記す鉄のごとく予き望幸彼城より
はふんぶらうして終白たがぬまてりりて城

大化石 十

土佐五幡多敷暖院寺あり者寺縁起云むうけ寺
よ忠儀上人住持一ぬ後又善院活山よりうらうり時

徳人上人よりうらうらとをかきしと暖院してあるか
これよりして暖院寺と号をそ時尚寺よ餌ら上

人よりかきしとをかきしと死して石と化せりと今又尚寺
は地ぬ牙一此宝物あり又伝承此は志徳山の禁又云の杖
せる石あり云俗傳云け石むうけ死又獵人あり者若の
けりいし云ぬいよのむうけを獵をけりうらうて彼獵師
まて露毫し夜も寐をけりうて死す獵師死後
けり山中へ入死して石と化しうと今探け所あり云乃
かちらあり

蘆根化石 十一

予珍藏のつらう芦の根よ是るるりなく其あり申空虚



諏訪の社の神宮あり

諸物化石 十五

人あり信て云越後必大飯類より水陸とりあり人の耳
よふなる大流ありけ不深山函谷より海流の地之る日
も物ありさる地之け流坪一物何よも扱はるる百日を
いさしてならまら石と化せと流つて道徳本の枝
葉及実を介け類まが石と化しるをゆると云ふ
比け流の石をえよせ一人ありて見るよこの石より
は合辨鍾乳之本を枝等と石中よりくむ別石之雲林石
譜云鍾乳の點化して石と成るんり又或人云越中伊奈川
那ソグ川牛嶽より不裂をきりけ不りて万物とも不石

と化せありるやいなるを云ふ英濃守御嶽月夜村山中
貝類決本徳草の類とくく石と化せり明和四年三月
よふり教品をゆり

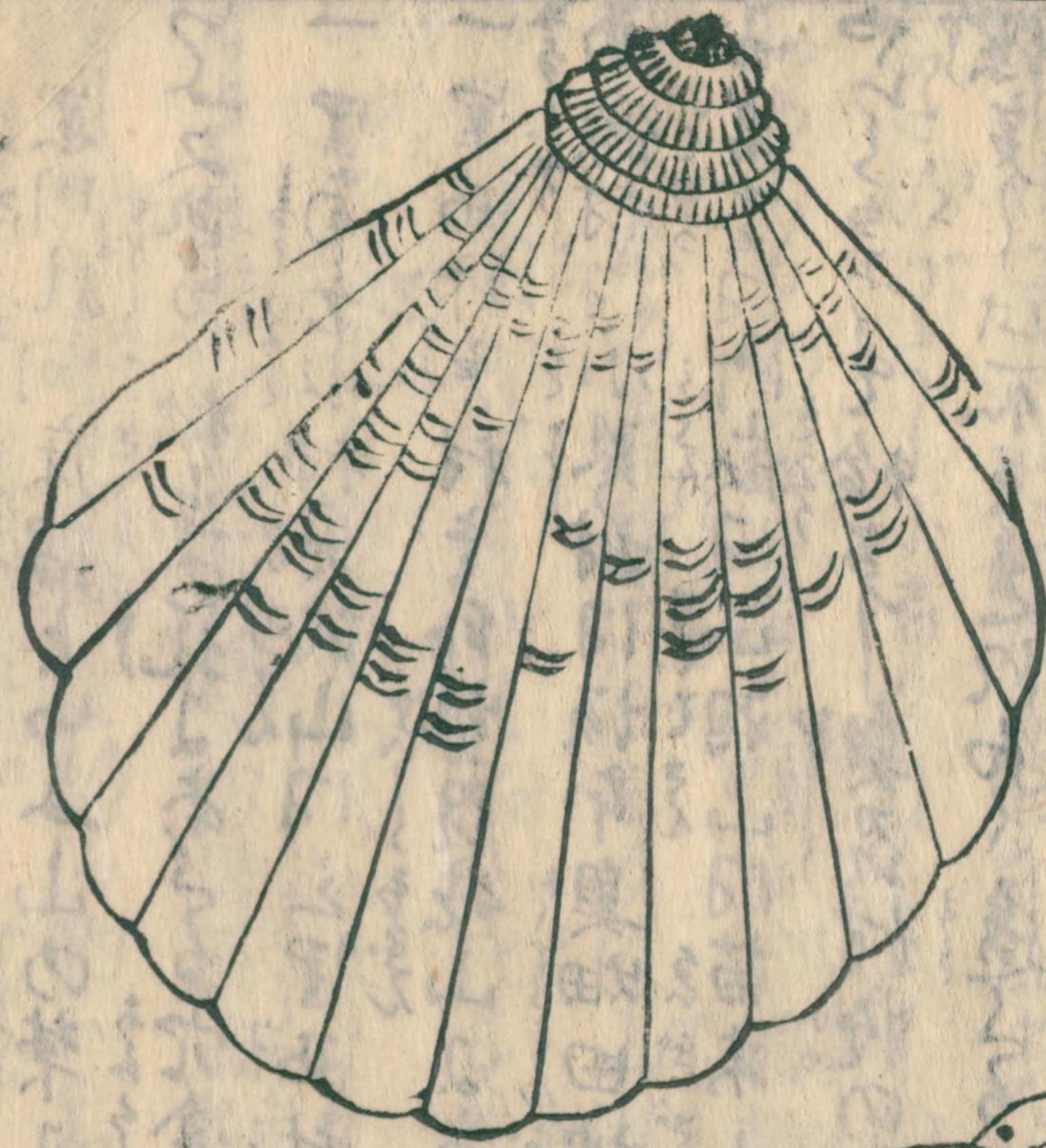
炭實化石 十六

江州坂中一島氏ハ予が弄石れ友へけ人云坂本より二里
そかり小苗鹿村小琴村の岩の田を掘よ炭實出らとく
石ありまて堅剛なるよありは色黒く大さ炭實れごと
深山よ出ると又は不より貝石も堀出を是と以て考査ハ炭
實の化石なるべし播磨高砂之浦氏炭實化石を殊勝に實
よ炭實の化石あり

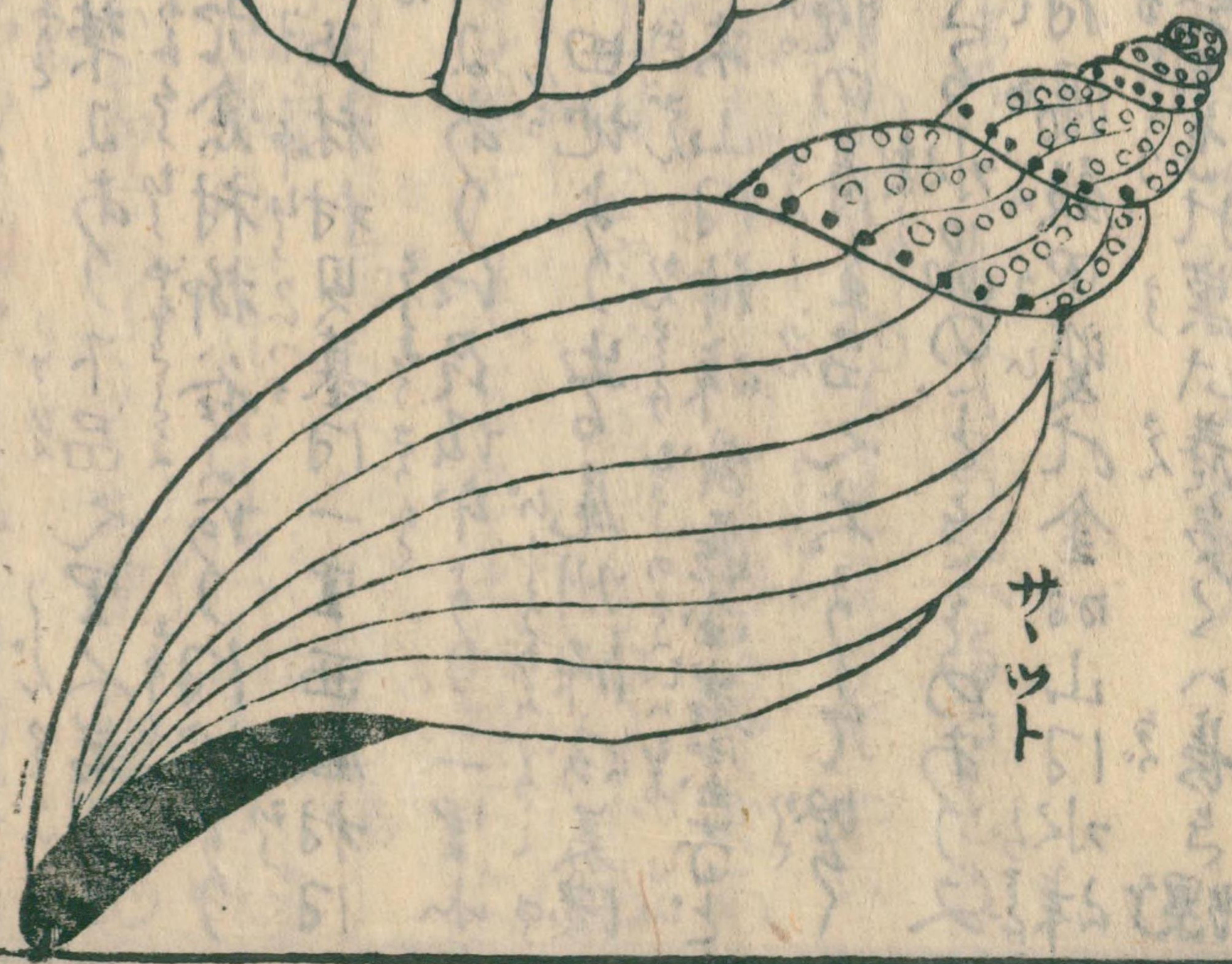
牛化石 十七



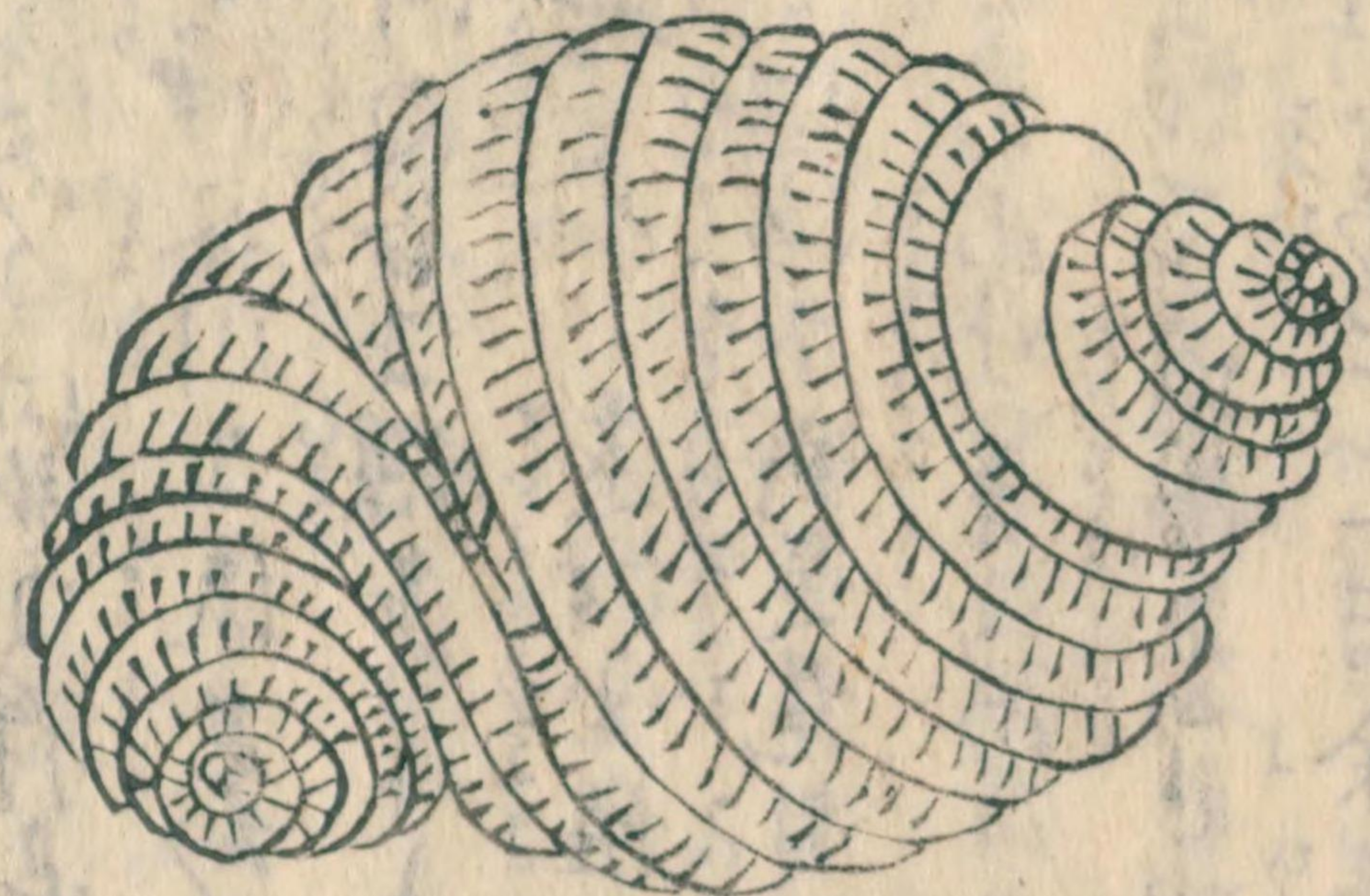
イター



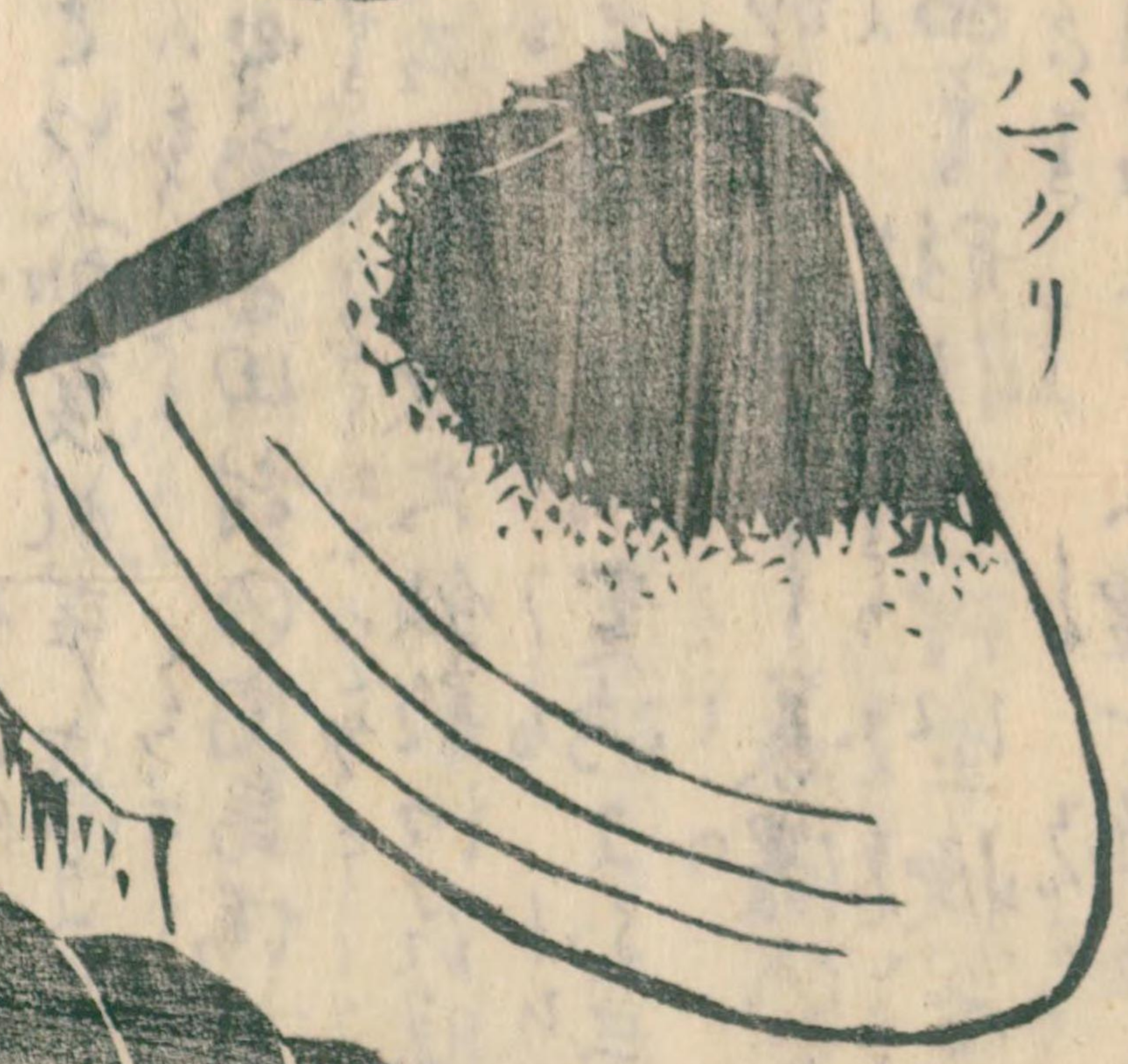
サハト



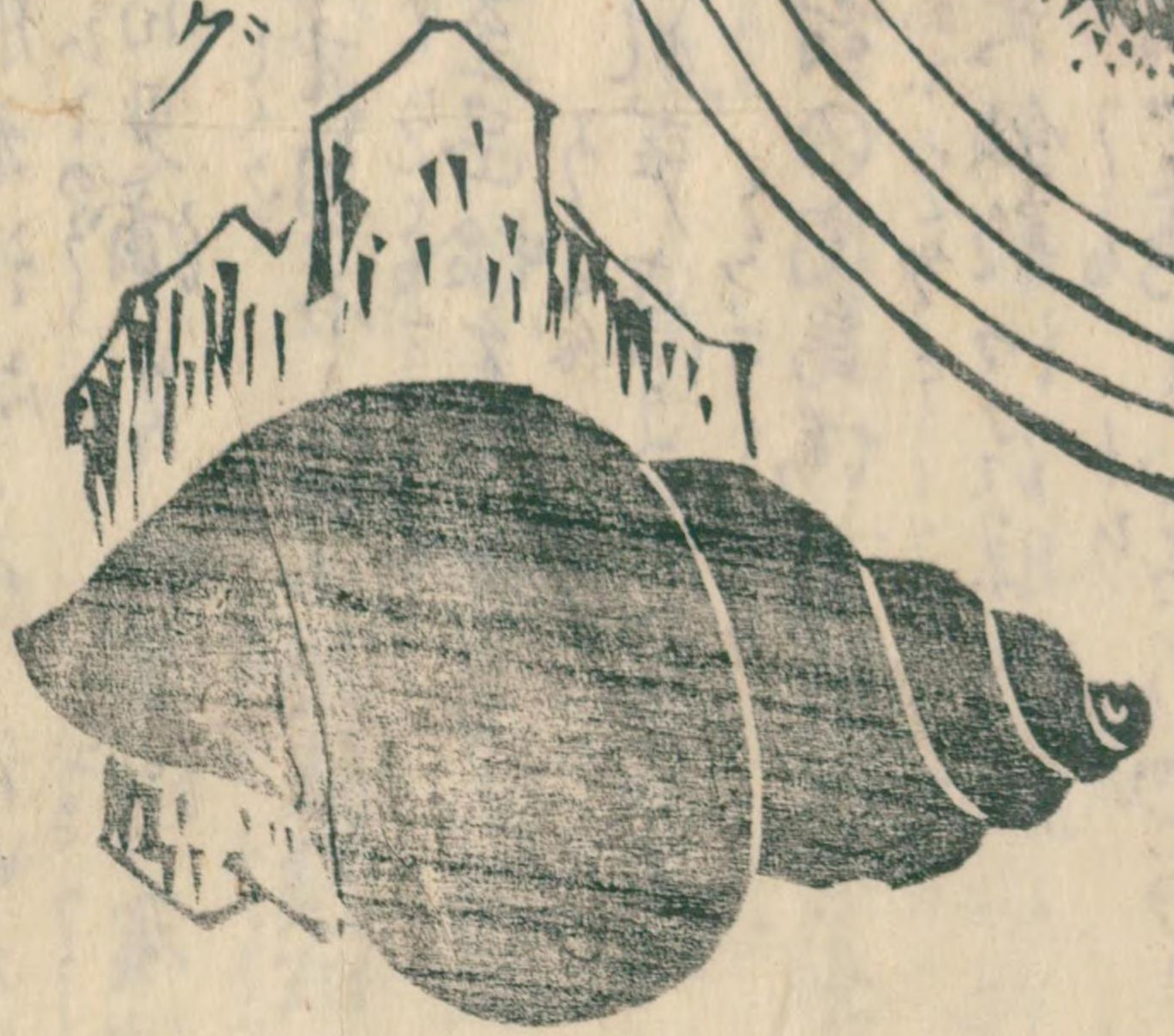
ウツラ



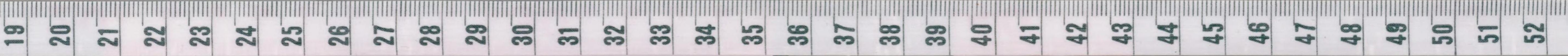
ハシクリ



テシグ



何レモ大サ圖ノ如シ



ちり下品るれどもまごかき 肥前磯波よりあり佐中堂免
川よりあり俗摺鉢石といふ越中見浦より一里沖磨石と
いふ所ありけし新産をけしの赤貝石といふ越後頸城郡
小黒村谷川に流せりたも至品蛤多し螺もあり又には
玉河の谷に螺多しといふ加賀れ芦産し赤貝石ありけ
ち甘多し遠江佐野郡富田村の内馬場養濃守古戰場
伊豆熱海下野足尾貝石山若狭大飯郡江乃膳所奥山紀呂
越後の山中等よりあり尾張の田間安治より玉品の地あり白
色よりて透徹きりかき螺多し養濃の月れ珠とい
ふ集り不百余品を形状色理堅硬者けりしるる大
坂天海乃き亭れ上人貝石二十六種を珍産を玉品に

粉化石 十九

大和玉生駒山信孝山よりあり信玄むり信貴れ多門城
松永強正忠義にありたる之より長狭れ地産の付焼
失して今亡中砂石と化せと燒茶石ありモミ石ありモ
ニ石ハ一粒づくはもよ石と化せり又奥尻
ち館よりあり赤茶石といふ是ハ一握りつか
り石と化せ色赤し重くかきりしる

石色白
モミ丹ノ
如シ



て名らよモミ石よりある事あり本邦國語に
載る燒茶砂といはれりとも稱呼遠るる
くよ福を

柴化石 二十

奥石河内山よそ七民衆と刈山ははるかき石ころ一
夜に化して石とありし今石化して麓に室暦十二年
又月二摺抄有る浦氏に所一築り石地をりて予二
ららひと浦氏又余と日志りて奇石を畜る

材木化石 廿二

奥石山よ一寺を建てる事ありしつて材木をたの
ふあまこの工通らるあつまるあつて造作を敷石を
てやうや成乾し古石とそそを積むたてんるをい
積む事あり材木一夜に化して石とありしと
園植角植を居鴨居字までとくくすと化してそ
まう今よありとそ

御衣化石 廿二

柏給に住吉大の神の韓退治の時めさき御衣の御
乾の時筑紫の油井の漢小ぬきをそめよ石と化
せりと今よ御衣のなごらる石あり里人御衣石といふ

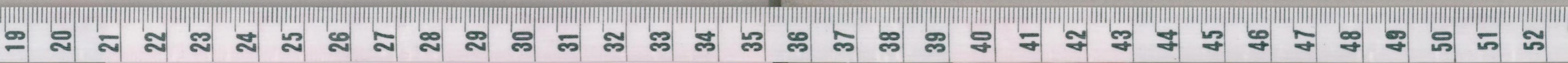
天馬石 廿三

阿波玉勝浦よ天馬石あり馬れ状に似たり大石あり古俗
傳えむりけいへ天馬降りてかしのとそ石に化せりと

黒柳化石 廿四

室暦七年九月の日移有るよ遊新し名塚の河上(瓢箪)
石と化し移りた能有るよと里むり西小山に村に保
村の同る山の茶よ敷十本の柿の本系あり何んをくけ

雲根志 卷三 土



不又... 古株... 石の喜... 實... 檜化石 廿五

浄土宗の寺... 殿のし... 幅... 三上... 石と...

とう... 竹... 本... 相... ケヤキ... 又... 是... とも...

帆柱化石 廿六

筑前... 帆柱化石 廿六



今化して石とるまうゆれ本ういふゆふ木の仔一なるに
まじりたるありりあり等あさやうよありい辺の里人
を傳ふむり一伝言大の神具玉退治の時の御船の帆柱
ありい所又控あふ今化して石とるまうとぞ

船木化石 廿七

周防玉海辺より巨大なる船板ありりくめ木さやうに
今化して石とるまうい辺の人よとらゆるよむり神功皇后
三韓退治の御時めされ一御船に浦に控あふよ化して
石となるまうとぞ

牡蛎石 廿八

介石と名をけりし一形状大よ異なるまう甲冑身延山よ

ありを言れとくが一便らうなる牡蛎殻小似たり元事化

一なる物より一と度抱るる一山崎に抱るる伊勢

安濃郡穴倉村より柳谷よつとそそ是あり外の里より

ちいさなるもの多し又下総は日光山よは抱ありい辺の俗

傳ふ山よ食せえとつと祈禱あり世れ人のとらをさう

むり一地藏尊人同と化し一ありて索麩を喰ふ教万れそ

う一財よ喰ひ居り一に方ともあくるせう後よあるる

山よなるよ地うめんよそ一谷とらうとそをせう

あんに化して石とるまう今よい谷かんのとと傳ふ事
これにてるるよ索麩よあふ牡蛎石之山城の宇治田原

山よ牡蛎石ありこれにけりしもの

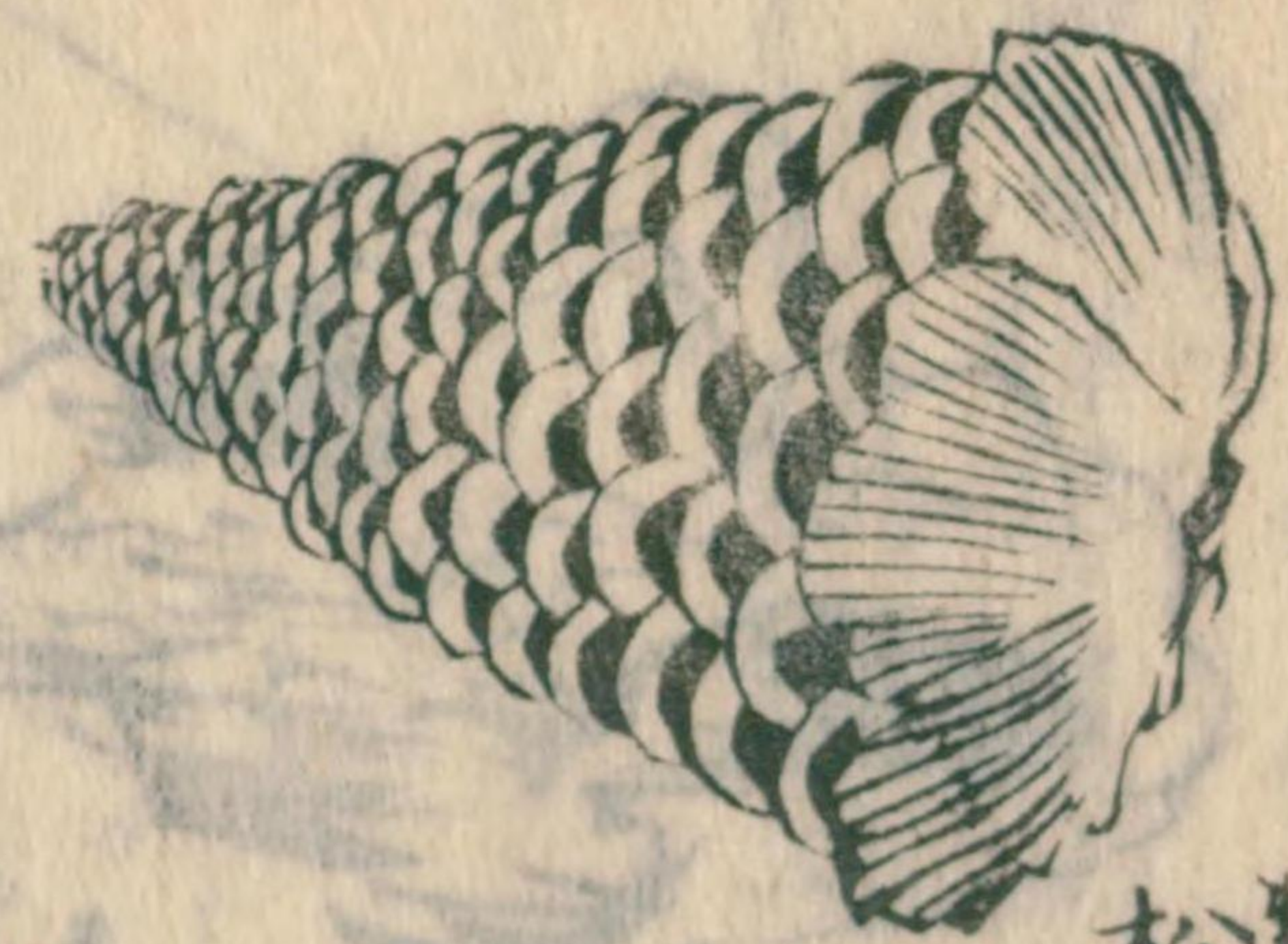


索類化石 廿九

宝曆十一年己冬に府大火の事あり或町友に索類とあ
 ざるよとれ藏のさうじ焼失とゆ一説にかきあはるを
 わりて記してさうじ索類焼きて炭のこくかき金
 石の声あり索類のかきあはるやうに江府田村氏よりあ
 へらる今予珍産の一あり

松越化石 三十

信長領田山の崩れよあはるより人伝をきくは似像の
 物よあはるはまよ松越の化石の中よりかきあはるを
 稀の地又松越の炭の化石あり松越に似て色かきあはる
 あり尾張屋よりあはるより今予珍産を



松越

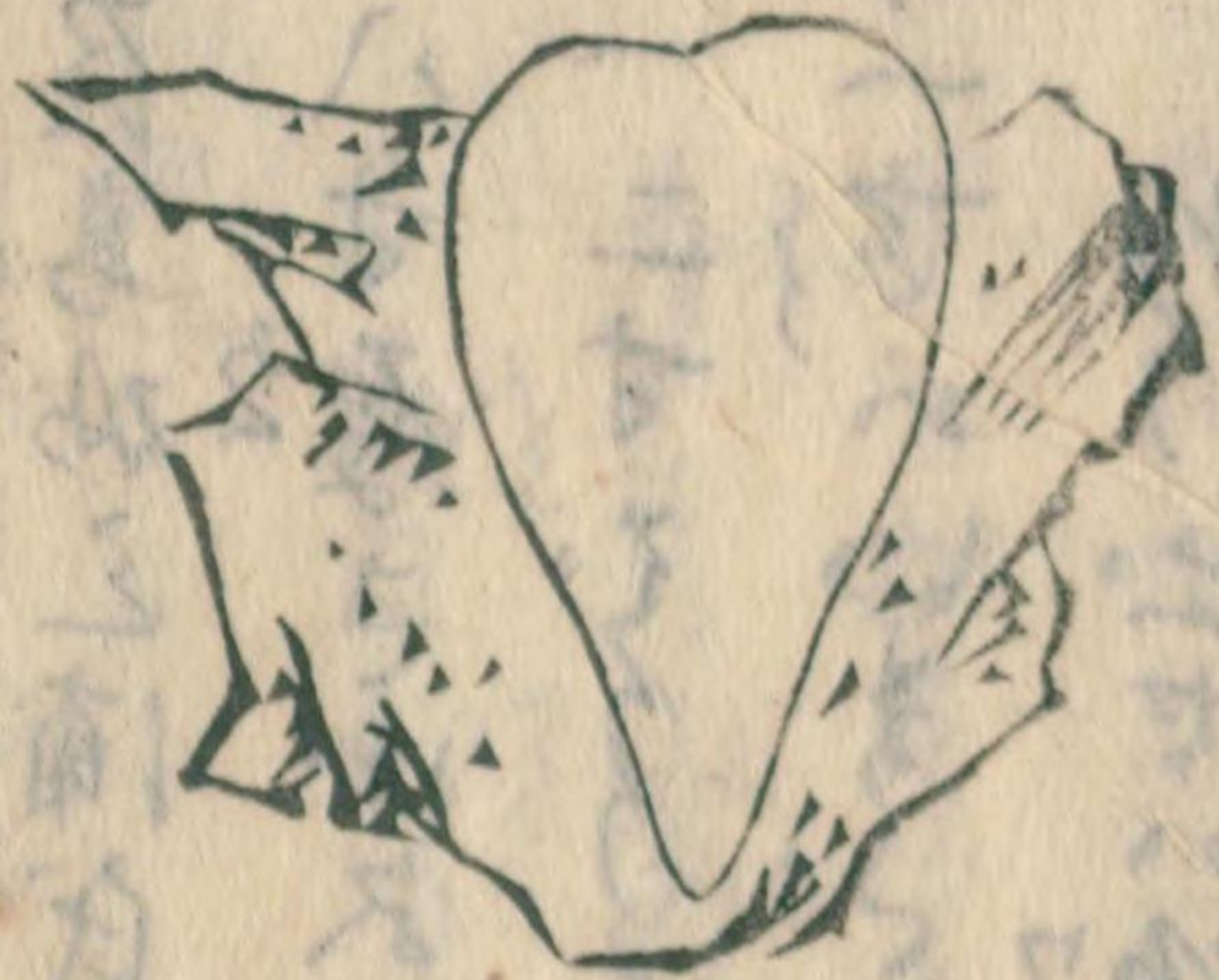


不詳

ホウノ松氏云又バセウ
ノボミ氏云



胡桃



木綿實



石炭實

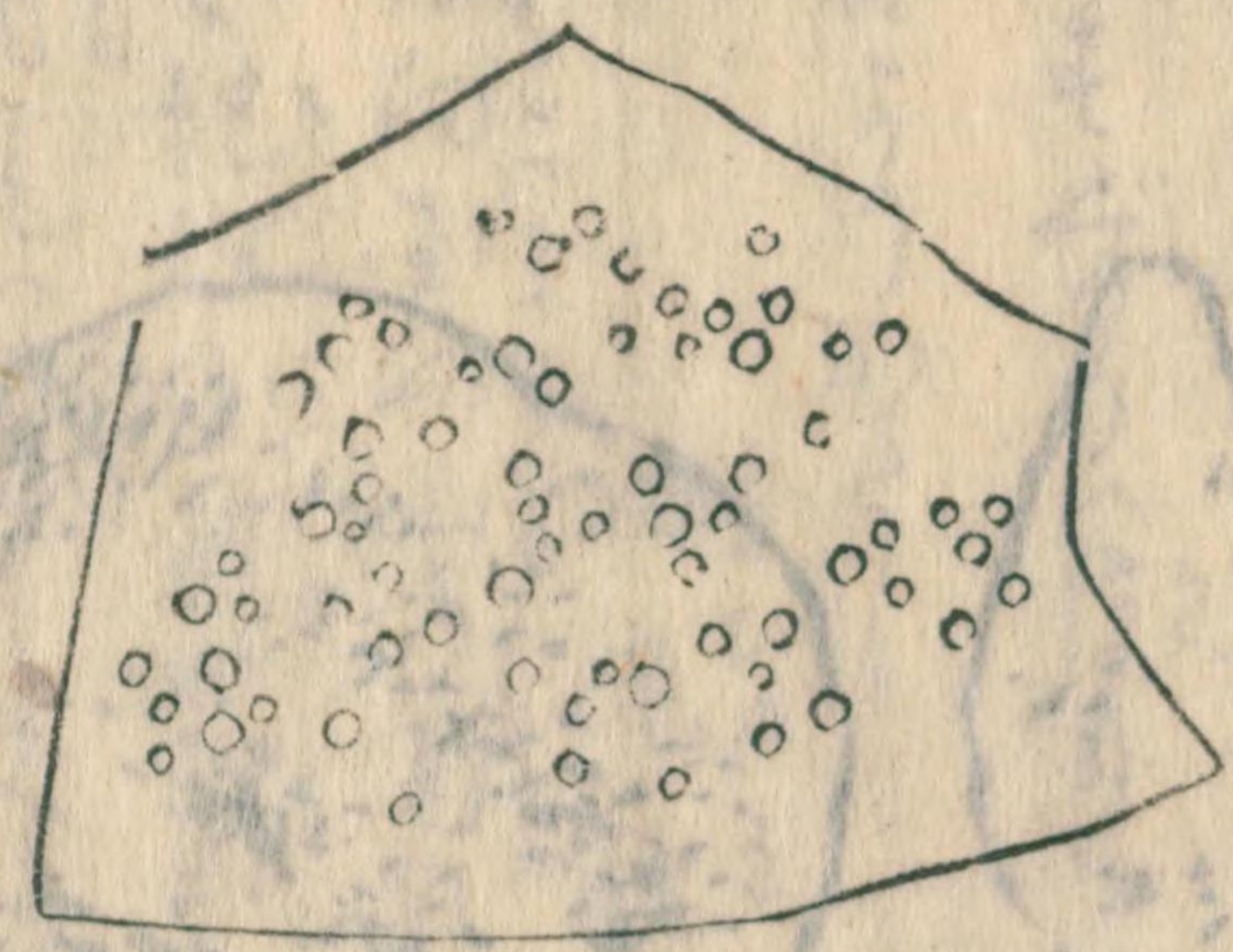
石 卅一



石 卅一
色ナリ

宝曆十二年二月播磨高砂之浦氏奥より白河園師某の
 事あり片々一方一二寸むらりある本溪のまきあり又
 片々二本溪あり一方いまま石なるは実の溪ありひ
 ぬり出せぬ岩半より一方の片は
 金のこくかく石より伝て石より
 かへは十之年正月十六日之浦氏の
 宅よりたぐひ初しと是と半破つて
 ありありと今ももこれと
 残る

氷化石 卅二



芋化石

大和玉伊勢寺より七不思議あり一は高寺敷川の氷
 解りて水底より所々石とありとい河底をたぐ
 りて白色ありてそのかくく形
 少のぼき石ありとて実いふ
 又越後河内谷より名は地あり
 是と推し玉床之河上玉と
 産する山あり玉膏流を
 水底より凝て石とあり疑ふ是之

古伝玉田此浦よりあり
 形状芋の頭之圓くして外



瘦あり石伸白色大に概粟或は
卷のこくまで堅硬之里合
くまむり弘法大師封
給ひ一芋るり化しそ石と
るりよつてくらむの芋と
似像の物とくも又る時
芋双えもよぬい石るり
を定ふ又豊後玉珠珠粒
二は名付物あり芋按ぢり
物とあり産物之土佐の
芋よは名呉物の部種あり

鳥木化石 廿四

争が産る木上木檀の化石あり大さ茶葉の
す丸木の小口切り面後のこく産のこく
つもがうい皮りくめらうそ木の性あざやんか
石よりか

海老化石 廿五

日向山向山の南れ海岸よりと又先年江
て紀伊玉熊野郡智海辺にそ指い
首尾の合し又産る之河玉海邊
まくれども性よ海老之
れ海をり皆仔細なる



化石仍て首尾今くぬけざるは稀く解石は類の如く
山城の伏見の古民家より堀堀よりあり万物造化備
亡中と掘て海老の化石をゆるるあり桂海虞衡志及
本草の石蠟是なり

鱧化石 廿六

或人一石を珍養と予是とを以て鱧の化石なりを
産らる所と云ぬるは長門至赤間関の海辺に拾ひ
たりと又尾張れ海邊にありとも又日向山
向の海辺にありとも又大坂本妻も珍養のうら
れ化石の鱧なりありは首尾なり予按るは一
の化石なり又播磨三浦氏も鱧石あり是は化石

あゝ似像の如く首尾よく似たり長さ七八寸あり

石菖蒲根化石 廿七

石菖蒲根の化石と云は伊勢北は谷川氏珍養せりか
より似たり予是とを以て似せし物と云ふは産地あり
べし予は芦根化石は様様の如くは及びたり
鵜飼石孔公藤子の類ありなり

鯉魚化石 廿八

明治二年閏三月十五日山城至相樂郡鷲峰山に登り
當山の役行者の古徳ありとけ辺に圓石多し西北坊法
中方より西を尋坊に説くは山林一里下の巖喜敷あり
所山田庄茶屋村又新福寺といふ小院あり南寺の付室

鯉魚の化石あり壺にこれをえりりと近山外石の中より
出たりと色黒く長さ尺をりり首尾鱗目あざやう
して金鱗生臭又臭るる有り石に付又
和二年五月十八日京東山産物と云い隣村に
して石より鯉魚石と持来りり予これをえりりと化石は
の化石像の抽之首尾目には鯉魚又似る鱗あり
と云く長さ尺余西に坊法寺の説とは相ある

竹化石 卅九

或人云尾張尾張の神磯氷室を来竹の化石を産し徳忌
此記ありと云実い云く石万物造化論にむり地を好て
夫余の竹の化石を好りすと云多季壽石と云ふと云

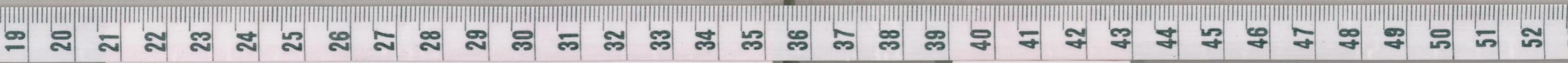
とも名のと云して生れとけり事を好て勢乃以津の谷
川氏松産せる竹根石あり化石又あり似像の相之

胡桃化石 四十

正安胡桃の化石一抽之似像の相より云く是と云
をがをらと云ふと云してをまて化石り侍くハ石り
流る尾乃師家山の石中より出たりと云玉田同麻
河川氏の更む石の色わら生れりて石之又和石
三月廿一日美濃国月吉山より出たり是又胡桃の化
石なりと云ふ

山茶実化石 四十一

大坂堀江葉蔭堂の松産之生れ山茶花の實の化石



毛くさくさ中ニ核ありし色くろ色金尖を帯ぶ加賀の
山此産ありと似像の物ニアリ又尾張河内藤原
川系産ありと云ふは河内河原山此産石の中に好く
尾張河内藤原山此産石を云ふ事又河内去る
事が宅より取りて椹化石といふ物を云ふ事か
よしてありけり立板のてし色白くかく産せらるる
つねり信濃玉真井新花橋山ニあり富山ニ松本多
け化石も河内山ありと云ふは此本の化石を云ふ事
富山河内の本化石も十余種あり云ふはもと産所は
むらさきくさくさ物多し美濃八屋のシテ化石も
尾張河内藤原山此産石を云ふ事又河内去る
事が宅より取りて椹化石といふ物を云ふ事か
よしてありけり立板のてし色白くかく産せらるる
つねり信濃玉真井新花橋山ニあり富山ニ松本多
け化石も河内山ありと云ふは此本の化石を云ふ事
富山河内の本化石も十余種あり云ふはもと産所は
むらさきくさくさ物多し美濃八屋のシテ化石も

椹化石 四十二

瀬の本此化石信濃玉真井新花橋山の松の化石等ハ河内山
楊樹枝化石 四十三
河内の産を云ふは此本の化石を云ふ事
まろく白く長さ尺をとり守れまうりまろく小枝の
美濃玉真井新花橋山此産ありと云ふ事
枝移木化石 四十四
美濃玉八屋の産之富山山谷ニ河内山ニ化石ありシテと云
ふは河内山ニありシテと云ふ事
抱木之と云ふは河内山ニありシテと云ふ事
又シテ石と云ふは河内山ニありシテと云ふ事
藻玉化石 四十五

瀬の本此化石信濃玉真井新花橋山の松の化石等ハ河内山

楊樹枝化石 四十三

河内の産を云ふは此本の化石を云ふ事
まろく白く長さ尺をとり守れまうりまろく小枝の
美濃玉真井新花橋山此産ありと云ふ事

枝移木化石 四十四

美濃玉八屋の産之富山山谷ニ河内山ニ化石ありシテと云
ふは河内山ニありシテと云ふ事
抱木之と云ふは河内山ニありシテと云ふ事
又シテ石と云ふは河内山ニありシテと云ふ事

藻玉化石 四十五

藻玉化石 四十五



海中ニある藤の突之色赤黒くして堅く平丸なる
物ハ色青白く大平みして胡椒むらじら此が化石之似像
此物より化石之花紋甚だあやう之尾張石神楽の
石中より破れりとい間藤澤河川氏の遺む不之

折板化石 四十六

層根板之厚さ一分幅は寸長さ尺許寸長白くして割肌
多しあやうやうあして節穴ありは石類の端に服被
未石翁とて予が毒石の友ら此を更なるは不東
寺の床の下より出ると

胸紐化石 四十七

江ノ坂本一鳩氏ハ予が毒石の友之一鳩氏此朋友東國

其一年東へ入り鎌倉より江の海海岸より此物
胸紐化石といふと長さ尺をう幅は五分紐糸の
かゝちららざやうあして端のまゝ曲りてかた石之と
予り此物古縁化石は根の抱へ海より更なる化石と云ふ

石榴突化石 四十八

明治四年三月廿七日濃呂月吉村北山中に拾ひ出ると
ち多く大さ柿のよう二つ又破れり石中空より出ると
方より核粒をたかり紙のまゝ膜ありて生へ石粉の
突く嵩山一月れ珠とて石あり又半く小徳木或へ葉
突の化石あり各條ははなむらじら

星化石 四十九



四玉記をくろく阿波は勝浦郡と星谷といふ所と星谷
あり方之間岩の上と星谷とて石とあるを空の内に星は
故と星石山と名く又尾張風土記又尾張必玉星山と
一石あり赤星の落りて之禁と星池といふあり星
よけ池と宿りと怪石とあり星の化せし石と今相
時星け山と落りといふ

星石 五十

移石成類今宮村に田れ中と星池といふありむら
け池中と落りて落ちまらむの怪石と化せしと又相模
鎌倉と星月夜といふ井あり土俗ゆへむらむら井
ふと落りて石と化せしと圖經曰星墮水化為石俗呼落星

灣と星石早石の種類もともを辨かす異ちるく
ふ別條よおせり

落星石 五十一

江石野洲郡橋村杉田氏説と云え文筆中の比南村の百姓
其日教後園よおてまをて落りて天よりもなる風も
くして空中に小聲あり目赤と一石をおとせし
をえりて書きの大ききてそとかく産くして合
文程あり夢溪筆談と大皇一震而墮地中得一
圓石といふの類なるなり

望夫石 五十二

王代一覽の云人皇二十九代宣化天皇二年丁巳新羅王と



任那国と争ふ天皇詔して大伴の磐石と狭手彦と遣
 任那と接しむ磐石の筑紫より多る三韓より
 狭手彦の御て任那と志しめ且百歳をせしむる
 授け給はば浦津の時を妻松浦佐用姫の身を
 山小堂て船をゆきわたりて石と化せし山を
 玉きり山と名けて石を望ま石と号し肥前松
 浦郡あり神異経より武昌山の望夫石れ類する
 松化石 五十三
 江府本門寺の境内に古松ありいつれしるや自然と枯
 倒せしるはなるら石と化せし小松根より石と化せし
 石と化せし今より由寺

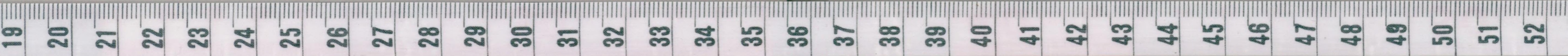
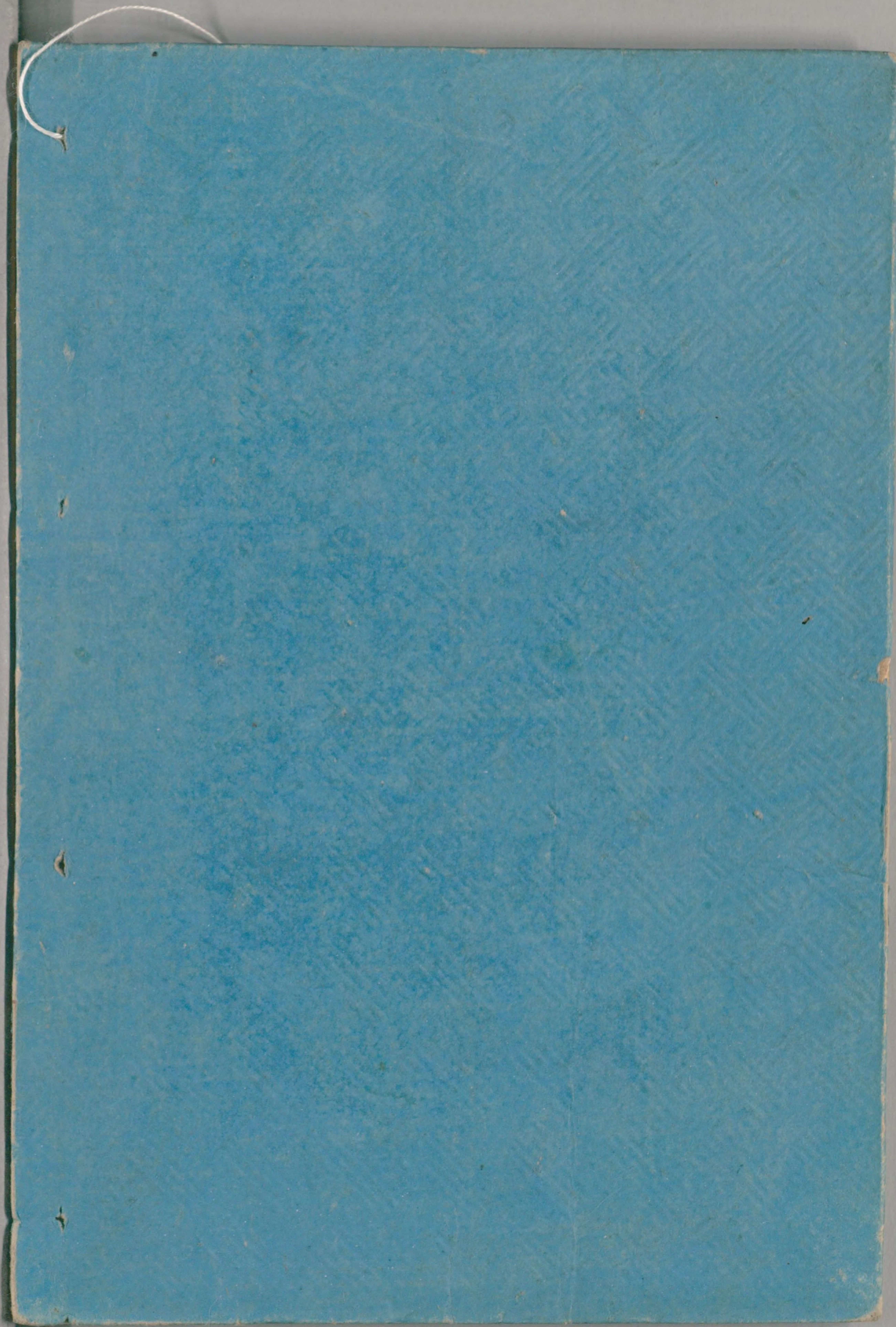
の門にあり又松西成
 七松村あり今土中
 堀出た地多し鬼皮之
 信長飯田山より松の
 化石を世に示し稀なり
 山にまき木より松皮
 ありと石より松皮
 出づる鬼皮松を松
 脂等の化石を拵り



石と化せし今より由寺
 雲根志卷之三終

雲根志 卷之三 終





国立国会図書館 タイトル『雲根志 前編5巻』 請求記号 特1-1505

ガラス使用